



Loveを教えて

みなるでい改

1. リフレッシュ休暇

「冬優子ちゃんは今、何してるつすかね？」

「きつと、プロデューサーと楽しくやつてるよ」

とある山の麓にある小洒落たロッジ。あさひと愛依の二人はそんなところに遊びに来ていた。

ストレイライトの全国コンサートツアーが終了した後の休暇。気分転換の時間。

三人は文字通り歌いまくった。ひたすら踊り尽くした。大観衆の前で最高のパフォーマンスを示すことができ、ツアーは文句なしに大成功。

そして今、休暇の時間が訪れたというわけだ。

あさひが『カブトムシを取りに行きたい』と言うので、愛依はそれに付き合うことにした。

あっちこっち走り回り、あんまりのんびりもしていなかったたので、果たして疲労回復に繋がるかどうかはわからないけれど。少なくとも、大いにリフレッシュすることはできそうだ。

事務所にて。愛依が『こーいう時。気晴らしに、どこか自然豊かな山にでも行けばいいのかな？』という極めてぼんやりとした要望をプロデューサーに伝えてみたところ、なかなか良さげなロッジを見つけて、その上予約までしてくれたのだった。

けれど……。

「冬優子ちゃんも一緒がよかったつす」

愛依からのお誘いに対し、冬優子はあつさりと言った。『ふゆはパス。その日は予定があるのよ』のと。つれない態度だけど、仕方がない。

その予定とは。愛依達がよく知っている人物と冬優

子が会うということ。つまるところ、デートということも。そういうことならば、お邪魔虫になつてはいけな
いだろう。愛依は納得した。あさひは残念そうながら
も、仕方がないと受け入れた。

「あはは。まあまあ。冬優子ちゃんもプロデューサー
と一緒にいたかつたんだよ」

「それって。今のわたしたちみたいにな、二人きりにな
りたかつたつてことつすか？」

「うん。誰だつてそういうときはあるよ」

「愛依ちゃんは、わたしと二人きりでよかつたつすか？」

「もちろんだよ」

愛依は、あさひの虫取りに付き合ってくれた。

虫取り網を持って、全身に虫除けスプレーをかけて

虫かごを持って、あさひと共に森の中をひたすら駆け
回った。決して嫌々でなく、心の底から楽しんでた。
ステージ上で見せるクールなイメージとはまるでかけ
離れた、親しみやすい姿だった。

マジ森林浴している感ハンパないね。マイナスイ
オン浴びまくってる感じ？ うーん、大自然最高！
とか、そんな調子ではしやぎ回った。

そうしてやがて、夜がやってきた。

2. くつろぎの時

『うーん。ヒノキ風呂気持ちいい。マジ生き返る。最高〜』

昇天するっていうのはこういうことなんじゃね？と、愛依は思った。

『なんだか変なおいがするっす』

『アハハ。入浴剤みたいだね、この香り』

まるで、修学旅行のよう。特別な事をしているわけではないけれど、ちよつとしたやりとりが楽しかった。

『あさひちゃん。お背中流そうか？』

『お願いするっす！』

お風呂は大きくて新しく清潔。

二人はたつぷりのお湯で体を洗い流して、ぽっかぽかになるまで暖まった。

お風呂から上がったら、二人で晩ご飯を作った。

『あさひちゃん、包丁使うのマジウマ〜』

『調理実習で教えてもらったっす』

『おー。あ。うち、何となく思いついたんだけどさ。お料理アイドルとか、結構いいんじゃない？』

『それ、面白そうっすね！』

『レギュラー番組が決まったら、うちをゲストに呼んで欲しいな。なんて』

『まかせて欲しいっす！』

じゃがいも玉ねぎ人参。それと豚肉。シンプルかつ定番な材料。それだけで何を作るのかが一目瞭然。炊飯器でご飯は炊いていたし、ルウも用意してあつて準備は万端。

二人はエプロンを着けて、持ち込んだ食材を使ってカレーを作ったのだった。

『おいしいっすー！』

『めっちゃうまー！』

とてもおいしく作る事ができて、二人揃って大満足。

そして今。パジャマに着替えてソファアークくつろぎ中。

「いやー。プロデューサーに感謝だよ。こんなにいいところを見つけてくれるなんてねー」

「そうっすね！ 冬優子ちゃんにも教えるっすー！」

あさひは昼間に捕まえたクワガタこと『冬優子ちゃん四号』の写真をスマホで撮って、冬優子に送ったのだった。

丁度その頃。ベッドの上でくつろいでいた冬優子は、クワガタの間接部のどアップ写真にぎよっとしたのだそう。

3. デリケートな問題

愛依は以前、あさひにあることをお願いした。

『約束、してもらえるかな?』

『わたしにも、それくらいのことわかるっすよ。……約束は守るっす』

『ありがと。あさひちゃん』

極めてデリケートな問題。それは、プロデューサーと冬優子の関係についてのこと。

決して誰にも明かしてはいけない事実。けれど、その関係は同じユニットのメンバーとして、大いに歓迎したい。

アイドルだって一人の人間であり、年頃の女の子だ。痛みを感じることもあれば、好きな人ができることだっ

てある。決して可愛いだけのお人形ではないのだ。少なくとも愛依はそう思っていた。

——ある時。愛依は冬優子から事実を打ち明けられたのだ。

冬優子は言ったものだ。自分でも、いけないことだとわかっている、と。

『アイドルっていう、浮き沈みの激しいサバイバルな環境にいるってのに、色恋い沙汰（いろこいさた）に現（ま）を抜かしている。つとにアイドル失格よね、ふゆは。あさひに偉そうな口を利けないわ』

大変けしからんことをしているのだと自嘲気味に呟く冬優子に、愛依は言った。

『ううん。そんなこと、ないよ!』

ユニットのパートナーとして。一人の親友として。

冬優子は誰よりも愛依を信頼し、秘めた思いを打ち明けてくれたのだ。愛依はそれに応えなければいけないと感じた。

だから。もう一人のメンバーであるあさひには、愛依の口から伝えるよ言った。

冬優子は真剣な表情で『……助かるわ』と、愛依に感謝した。

そして愛依は改めて『冬優子とプロデューサーの関係を、絶対に口外しないで』と、あさひにお願いをしたのだ。静かに。穏やかな口調で。

ストレイライトという最高のユニットを、これからも守り続けたい。それと共に、親友の思いも尊重したい。ただその一心だった。

幸いな事に、その気持ちはあさひも同じだった。

もつと多くの時間が経って、いつかストレイライトが解散する時が来るまで、秘密を守り続ける。あさひは愛依の前でそう誓った。一切駄々をこねることもなく、素直に。

『誰にも言わないっす』

愛依は嬉しそうに笑いながら『あさひちゃんきゅっ』と、言った。

僅かに開いたドアの向こうで、誰かが小さく呟いた。

『ありがと……』

と。

愛依は、あさひに見えないようにこっそりと、腰の後ろでピースサインを作って見せた。後ろで見ているであろう人物の為に。

4. Loveを教えて

二人はソファーに腰掛けてくつろぎ中。

「愛依ちゃんは、優しいっす」

「え？ そうかな？」

「冬優子ちゃんは……優しいけど、時々厳しいっす」

「あはは。冬優子ちゃんは真面目なんだよ。プロ意識の塊っていうか、マジ尊敬するわ」

「そうっすね。一生懸命っす」

「だからこそ、うちらがきちんとまとまっていられるんじゃないかな？」

この場にはない同僚の話で盛り上がったりする。

「……愛依ちゃんは、好きな人っているっすか？」

ふと、あさひはそんな事を聞いてきた。

「え？ うちの好きな人？」

「そうっす」

「それは……。か、家族、とか……？」

間違いではない。けれど、あさひが求めていた答えではなかった。

「あ、そーいうのじゃないっす。冬優子ちゃんにとっての、プロデューサーさんみたいな関係の人っす」

「ら、『ライク』じゃなくて、『ラブ』ってことね？」

あさひは大きく頷いた。

それは大変に難し……くはないけれど、ちよつとばかり答えにくい質問だと愛依は思った。

「いない。……と、思う」

少なくとも今は、そうだ。愛依は正直に答えた。

「そうっすか」

なぜかあさひはちよつと残念そう。

「あさひちゃん、どつたの？」

「『ライク』じゃない『ラブ』がどんなものなのか、教えて欲しかったっす」

5. ファーストキス

愛依は優しく面倒見の良い女の子。五人兄弟の真ん中。上にも下にも兄弟がいるからか、とても家庭的な性格だった。

なぜ？ どうして？ 好奇心旺盛なあさひの口から矢継ぎ早に放たれる質問に、一つ一つきちんと向き合いたいと思った。適当にはぐらかしたりせずに、丁寧に。

今回の質問には特に真剣に答えたかった。女の子にとって、とても大切な事だから。

だけでもまず、前提条件を伝えておかなければいけない。そうでなければ、自分の言葉に説得力が無いと愛依自身が思ったから。

「あさひちゃん、ごめん。うちね……。こんな見た目なんだけど。その……。今までお、男の人と、おつき

合いたったことがなくて」

小麦色の肌。開いた胸元から見えるくつきりとした谷間。ギャル系だなんて呼ばれるように派手で、いかにも男と遊んでいそうな見た目と違って、愛依はとてもウブな心の持ち主だった。

「彼氏とかいたことないっすか？」

「ないないない！ 一度もないよ！ マジで！」

「そうっすか。……愛依ちゃん、モてそうなのに不思議っす」

「あのね。その……。お、おつき合ってくださいって言われたことは、何度もあるよ？ けど……うち、怖くて」

毎回律儀に断ってしまうようだった。

「そんなだから……。うまく教えられない、かも」

「それでもいいっす！ 教えて欲しいっす！」

「え、えと……。その……」

「『ライク』と『ラブ』の違いを教えて欲しいっす！」

あさひがズンと近づいてくる。至近距離でキラキラした眼差しを向けられる。

期待しなくなりなあさひを見て、愛依は引き下がれなくなっていた。

親愛の行為とは例えば何か。連想すれば『それ』に辿り着くのは自明の理。愛依は思い浮かんだ答えを口にした。

「た……例えばその。き、キス……する、とか？」

身長差は9センチ程。愛依は少し腰を屈めてみせて、あさひに合わせようとしていた。

「キスをするのが、ラブなんすね？」

「う、うん。その一つじゃないかって、思う。あ、あ、でも外国だと、家族や友達同士でもするっていうけど……。日本だと、親愛な人同士ですること、だよな？ だからラブ、なのかな〜って感じ？」

けれどそこで打ち合わせ不足というのか、コミュニケーションミスが発生。愛依の腰を屈める動作と同時にあさひが突然バネのような勢いでつま先立ちになり、背伸びをってしまったのだ。

その結果、接触事故が発生。重大インシデント。

「わぶっ！」

「んっ！」

ぷにゆんと柔らかな感触。

あくまでも寸止めの形だけで済ますはずが、フルコンタクトモード。本当のキスになってしまった。

「んんんっ!？」

「ん？ ん？」

愛依にとつてもあさひにとつても初めてののこと。ファーストキス。

(う、うち……。あさひちゃんと、キスしちやっただ!?)

(なるほどっす。キスって、こんな感じなんすね)

まるで意図していなかったファーストキス。心の準備もへったくれない。

けれど二人とも、嫌な気持ちはまるでなかった。

(あさひちゃん……。可愛い)

(愛依ちゃんの唇、柔らかいっす)

あさひは何となく、ほんの少しだけ『ラブ』の意味がわかったような気がした。愛依の事をもっと理解したいと思ったのだ。

愛依もまた、同じ気持ちになっていた。

(うち……。もつと、したいな。あさひちゃんと、キス。それで……。つて、うち、何考えてるの!? マジあり得ないっしょ! お、女の子同士で!? どこまでするっの!?)

愛依は慌てた。声に出すのが憚られるようなことを考えている自分に、待ったをかけた。けれどそんな常識、あさひには通じないのだった。

「わたし愛依ちゃんともっとキスしたいっす！ してもいいっすか？」

「う、うん」

そうもはつきりと言われたから、愛依は引き下がれなくなっていた。

「い、いいよ？」

「ありがとうっす！」

満面の笑みを浮かべたあさひが、愛依の体にしがみついていた。

6. 好奇心

「冬優子ちゃんも今頃、プロデューサーさんとしつぱりウフフなことをしているんすかね？」

「あさひちゃん、なんだか例えが昭和っぽい？」

「しょうもない話を続けながら、何度となく唇を重ねた。」

それと同時に抱きしめ合ってみたりもした。その度に愛しさが込み上げてくる。

「あさひちゃん、マジで肌綺麗。細いし、白すぎっしょ。妖精さん感ある〜」

それでいて健康的な、しつとりとした瑞々しさ。

「そうっすか？ 愛依ちゃんは、なんだかトロピカルって感じっす！」

「あはは。南国娘か〜。納得〜。……最初は、女の子同士でキスするなんてって思ってたけど。悪くないね」
「わたしもそう思うっす。なんだか体がぼかぼかしてきたっすよ」

二人は苦楽を共にしてきた仲間。かけがえない親友。そして良い意味で切磋琢磨するライバル。

レッスンやお仕事。そして大観衆を前にしたコンサート。どんな時でも一緒。同じ炊飯器のご飯を食べることもあった。まさに戦友と言えた。もしそこに『恋人』という名の関係が新たに加わったとしたら、果たしてどうなってしまうのだろうか？

(あさひちゃんは、お人形さんみたい)

それでも愛依にとってあさひは年下の、妹みたいな女の子。冬優子とは違ったスタンスで、あさひの暴走

をやんわりと止めたりしている。

(愛依ちゃんは、日焼けした人魚さんみたいっす)

あさひにとつて愛依は年上の、頼りになる優しいお姉さん。いつも前のめりな自分を宥めてくれる。

二人は顔がくつつきそうなくらいの距離で、ひたすら見つめあう。時々思い出したようにキスをして、どちらからともなく手を重ね合わせた。

「あさひちゃん。……ちよつと、恥ずかしいかも」

「そうっすね。ちよつと、照れるっすね」

二人はもももぞと抱きしめあった。体の感触を確かめるかのように。幾度となくそんな事を繰り返して、自然と大きくて柔らかなソファアに横になっていった。

「電気、消す？」

「でも暗くすると、うまくできないっす」

「そう、だね。ん……」

あさひはそう言いながら、愛依の唇にカプツと噛みついてた。まるで甘噛みのよう。

「んん……。ねえ、あさひちゃん」

鼓動が高まっていく中、愛依はあさひに言った。

「もつと、してみない？」

好奇心旺盛なあさひが、愛依からの申し出を断るはずがなかった。

7. 愛撫

ソファーの上には霞もない姿の二人。お互い揃ってパジャマと下着を脱いで、産まれたままの素肌を晒していた。

モデル顔負けのスタイルを持つ愛依。たわわに実った果実のように丸みを帯びた膨らみが二つ、ふるると揺れる。

横たわり寝そべる愛依の上に、あさひは覆い被さっていた。

むつちりとした肉感的なスタイルの愛依とは異なり、あさひは小柄でほっそりとした体つきで、胸の膨らみもまた控えめだった。

染み一つない白い肌は、冗談抜きで見惚れてしまう。一体、この華奢な体のどこからあの凄まじい運動エネルギーが湧き出てくるのだろうか、愛依は思った。

あさひの手が愛依の胸を揉み回していく。仰向けになっても型崩れしない胸を、ふさ、ふさ、とゆつくりと、パン生地を扱うかのように歪ませる。

「ん……。あつ」

若く、ふにゆふにゆした柔らかな感触のそれは、手の平に吸い付きそうな程に瑞々しい。

「愛依ちゃんのおっぱいおつきいっすね〜！ マシユマロみたいっす！ ぷにゆぷにゆっす！」

「あ……。んっ！ あさひちゃ……。はう！」

お気に入りのおもちゃを見つけた時のように、あさひはそれを揉み回す。

愛依の胸は、あさひの小さくて細い手では持て余してしまう程のボリューム。細い指先が膨らみの中にめ

り込む。

「ひゃっ！ そ、そこは舐めちゃ……んっ！」

「ミルクが出そうっす」

「出……ないよ？ ん……。うちのミルクはカフェオレ風味、かも？」

「それいいっすね！ 飲みたいっす！ 出して欲しいっす！」

「ん。あ……ごめん。出ないんだな。あつ！ 売り切れ？ ……準備中、かな？」

「残念っす」

あさひはそう言つて、ちゅーちゅーと吸い付いていた。少々大きめの乳輪の中心について、ぷつくらと膨らんでいた乳首に。

「あつ！ うっ！ くううっ！」

「おっぱいって、こんな風にいじくられると気持ちいいものなんすか？」

「う、ん。気持ちいいよ？ あう……。くひっ！ んっ！こそばゆい、っていうか……。背筋、びりびりって痺れる感じ。いじられればいじられる程に、変な声が自然と、出て……。んっ！ きちやうよ……。あつ！ はあ……。んっ！」

「そーなんすか」

愛依の反応が面白いのか、あさひは何度となく乳首に吸いついていく。

右、左、右……。両手で膨らみを寄せあげて、尖った乳首を左右同時に舌先で転がす。

「あつは……。んっ！ くあつ！ だ、めええ！ ちくび……。あああ！」

「なにがだめなんすか？」

「き、もち……。よく、て……。くひっ！ あさひちゃん……上手すぎ……。くふー！」

「それならいいじゃないっすか。何もだめじゃないっすね」

にかつと笑うあさひ。されるがままの愛依とは異なり、主導権を完全に握っている。

「わたしがもつともつと、愛依ちゃんを気持ちよくさせてあげるっす」

「うあ……。だ、め……。あ、あ、あ！ おかしく、なっっちゃう……。！」

「痛かったら言ってくださいっす」

歯医者のような事を言うあさひ。胸を揉む力がキュツと強まる。けれどそれは絶妙な力加減。

「おっぱいを揉み揉みしたり、ちゅーちゅー吸い付いたりすると、気持ち良くなっちゃうものなんすね。女の子の体って」

「くひっ！ あつ！ うっ！ おっぱいは、感じちゃうところ……。だから。はうー！」

優しい愛撫が一転。今度はもぎゆもぎゆと強めに掴んで揉み潰す。乳首もくにやりと折り曲げられる。愛依の体がビクンと跳ねた。

「あ、あああ！ だ、めええ！ はううっ！ そんなに、いじっちゃう……。はふっー！」

「それにしても、愛依ちゃんのおっぱいは大きいっす。」

冬優子ちゃんとは全然違うっす」

「ん……。あさひちゃん。おっぱいの大きさはね。その……。結構気にしてる人もいるから。あまり、言わないであげてね。あっ！」

「わかったっす。……。そうっすよね。体の大きさとか、努力じゃどうにもできないことっすよね」

あさひは何となく自分の胸を両手で持ち上げてみた。僅かな膨らみを。

「凛世ちゃんとか、気にしていそうっすね。胸の大きさ」

「うん。そう、だね。……。んっ。あ……。さひ、ちゃん。あ、赤ちゃん……。みたいだよお」

「愛依ちゃんのおっぱいを吸つてると、なんだか落ちつくっす」

「そっか。それなら、良かったね。アハハ。んっ！あっ！」

「乳首がいいんすね？ 何となくコツがわかってきたっす」

「あっ！ だめ……。そんな、あっ！」

唇をすぼめて乳首を固定し、ざらつく舌尖で愛撫。

この子は、すごい。レッスンの時とまるで同じ。ちよつとやってみただけで要領を得るといふのか、コツを掴んでしまうのだ。あさひの適応力の高さは相変わらずだった。愛依の体がひくひくと震える。

あさひはひたすら愛依の乳首を指先で転がしていく。

「ひあっ！ だめ！ あっ！ やっ！ やばいって……。これ。くうっ！」

「どうやばいんすか？」

「いき、そ。こみ上げて……。くうっ！」

「何がこみ上げてくるんすか？」

切ない気持ち。

年下の、妹みたいな女の子に胸を好き放題にいじくり回されて、快感責めにされている。快感の出所を完全に把握されている。

「気持ちいい感じが、高まつてく……。の。うち、いく！だめ！ あっ！ いっちやいそう！ こんなっ！」

あさひの細い指先が、愛依のぷつくりと膨らんだ乳首を摘まんでふにふにとこね回す。

「あ、あ！ おっぱい、気持ちいい。くうう！ う

ち、いっちやう！ おっぱいちゅーちゅーされて、いっちやう！ あ、あ、あ！ あっ、あっ、はっ、あうっ、ああ……。！」

「ピクピクして、愛依ちゃんの反応がすごく可愛いっす。女の子の体って、本当に面白いっすね！ 愛依ちゃん。潔くいっちやうっすよ？」

「だ、め。あ、あ……。おっぱい、が……。い、い……。あふっ！ はふっ！ んあああああっ！」

「あ、今イっただつすね？ 愛依ちゃん」

愛依は一際大きく震えて、そして絶頂を迎えさせられていた。

備える暇すら与えられずに大きな胸をいじくり回されて、初めてだというのに嬌声を上げさせられた。

8. お返し

愛依は脱力してソファーに横たわっている。

はあはあと荒かった吐息が、ようやくのことで落ち着いてきた。

「あ、あさひちゃん上手すぎ。マジテクニシャン。うち、おっぱいいじくられただけでイっちゃったよ」

こんな感覚は、初めてだった。

「そうっすか？」

何も考えていないようできて、絶妙な力加減だった。

「でも、マジですごく気持ちよかったよ。ありがとう」

「どういたしましてっす」

だから、というわけではないけれど。愛依は言った。むくりと起き、大きく息をつきながら。

「お礼に、今度はうちがするね？」

「どうするっすか？」

「ふふーん。こうするの」

「わっ！ そんなところ汚いっす！」

愛依はあさひをソファーに深く腰掛けさせてから、無防備に開いていた舌を這わせた。細い足を左右に開かせて、露わになった割れ目に顔を埋めたのだ。

「あっー！」

無関心なようできて、さすがにそんなところを刺激されて、あさひは頬を赤らめていた。

「な、なんか……変な感じ……っす」

あさひはどんなに大観衆の前でも動じない子。体力が有り余っている上に、ボーカル、ダンス、そしてビジュアル共に天性の才能を持つ少女。

だけど愛依は知っていた。

あさひは誰よりも努力を惜しまない、真面目でひたむきな頑張り屋さんなのだということを。

それが、ごく一部の関係者だけが知る、芹沢あさひというアイドルの『本当』だった。

「あ、ああ……。な、んか。変な……声が……出ちゃう、っす」

細い体。しなやかな、柔軟性に富んだ肢体。本当に、この子供のような体のどこに凄まじいばかりのバイタリテイが秘められているのだろうか、愛依は思った。

失礼な考えだとわかっているながら。

「あさひちゃん。可愛すぎ。ん……」

「愛依、ちゃん……。む、むずむずして……んっ！あっ！」

「あ、もしかして、嫌だった？ やめる？ うち、悪乗りしすぎちゃったかな？」

心配そうに言う愛依に、あさひは頭を振った。

「違うっす。続けて欲しいっす。このままされると自分がどうなっちゃうのか……知りたいっす」

「そういうことなら。最後までいつちやうよ？」

「お願いするっす、愛依ちゃん！」

愛依は二カつと笑いながら、続きを始める。

淡い、産毛のような陰毛の中に、一筋の割れ目。愛依の舌がっぷりと入っていく。

これがクンニリングスと呼ばれる行為だとは、あさは知らなかった。

「くっ！ う……」

あさは歯を食いしばって耐えている。震える膝小僧を必死に掴みながら。

愛依の舌が小刻みに動き、ちゅぷちゅぷと湿り気を帯びた音と共に、割れ目の中が少しずつほぐされていく。

恐らく、両親以外の誰にも手で触れられたことのない所。そんなところに舌を這わされていく。

「なん、すか……これ。くうっ！」

どんな状況でも動じないあさひが、端正な顔を歪めている。眉間に皺を寄せて、目を潤ませている。

「だ、め……つす。愛依ちゃ……くあっ！ んっ！」

(あさひちゃんのこんな声、初めて聞いた)

女子として、最も恥ずかしい所を刺激されている。

あさひもそれくらいのことには理解していた。

「あ、あ、あ！ くううっ！ あ……だ、め……うううっ！
くあっ！ んっ！」

だめ、なのだ。拒否はできないししたくもないはずなのに、そんな言葉が出る。体が恥じらいに耐えかねて、つい本能的に出てしまう言葉なのではないかと、あさひは後になってから考えたものだ。

唾液のぬめりと共に、舌先のざらついた感触。綺麗

な一筋の割れ目がこじ開けられて、生々しいサーモンピンクの小淫唇をべろべろと舐め回す。

(あさひちゃんのお汁、溢れてく。……うち、舐めてるんだ。あさひちゃんの……恥ずかしい所を)

「あ、あ！ こんな声……出したくないっす。なのに……んっ！ あっ！ 我慢……できない……っす！」

愛依の右手。細い指先に見える華やかに彩られたネイルは、あさひのクリトリスを見つけ出して、撫で回していた。

「あひい！ 何、すか!? あっ！」

ぷつくりと僅かに膨らんだ部分。キュツと摘ままれて、くりくりとこね回される。

「くひいっ！ あうっ！」

あさひの背筋にしびれが走る。

「あひっ！ あっ！ はっ！ だ、めっす！ 変になるっす！ あ、あ、あっ！ くうううっ！」

敏感な部分を二カ所同時に刺激され、あさひは慌てていた。

力が抜ける。何かが一気に込み上げる。好きな人の舌と指で、意識を飛ばされそうになっていく。

「なんなんすか！ これ！ うあっ！ ああ！ んうっ！ 堪えきれな……んあっ！ くひいっ！ あひっ！ あっあっあっ！ あああっ！ あっ！ はうっ！ あうっ！ ……い、いったみたいっす！ わたし、今、いった……っす！ 愛依ちゃんストツッっす！ あ、あ、あっ！ い……った、っす！」

恥部を散々弄ばれて、あさひは遂に達してしまっただ。

9. 羨ましいこと

じつとりとした半開きの眼差し。つまりはジト目と呼ばれるような目付き。あさひはちよつと不機嫌そうに頬を膨らませている。

「こういうとき、男の人が羨ましいっす」

「うっ！ くっあっ！ ゆ、指だって、結構刺激的だよ？ んっ！」

愛依はグラマラスな体をソファーに横たえて、あさひのおもちゃにされていた。

恥部を愛依の舌でたつぷりと愛撫されてイカされたからか、あさひは愛依に妙な対抗意識を燃やしていた。

『今度は愛依ちゃんにイッてもらおうっす』

とか言ってから、細い指を愛依の割れ目に突っ込ん

で、蠢かせていた。

「わたしの指なんかより、男の人のお●んちんの方が遙かに太くて長いっす。奥の方まで届きそうっす。それが羨ましいっす」

くちゆくちゆと湿った音。指の出し入れが忙しく続く。

「プロデューサーさんはきつと、冬優子ちゃんを四つん這いにさせて、動物みたいに後ろからガンガンやつてるに違いないっす。わたしもそんなことしてみたかったっす」

男と女。体の違いはなかなかどうにもならないもの。「あっあっああっ！ あさひちゃ……。手加減、して。んっ！」

「だめっす。愛依ちゃんは、わたしの指でたつぷりと

感じてもらうっす」

「そ、んなああ！ あああああつ！ はうっ！ あつ！
んあつ！ うち……変に……なるー！」

くちゆくちゆくちゆくちゆ……。湿りが増していき、
愛液がしたり落ちる。

「今ごろ。冬優子ちゃんもプロデューサーさんと、こ
んなことしてるっすかね？」

「どう、だろ？ あつ！ んっ！ だ、だめっ！ あ
さひちゃんだめっ！ うちまたイっちゃう！ あつあつ
あつ！ あひいっ！ マジ激しすぎい！ 指の動き、
やばすぎ……くひいっ！」

快樂を与えられすぎて、びくんびくんと震える愛依。
けれどあさひは満足していなさそう。

「あ、今イったっすね？ でも、これからっすよ」

「え？ え？ はうっ！ まだ、イったばかり……ああ
んっ！ はうっ！」

「今度は愛依ちゃんがしてくれたみたいに、するっす」

あさひは愛依の割れ目に舌を這わせ始めた。ちろち
ろとピンク色の舌が、愛依の敏感な割れ目へと這う。

「あああああつ！ あさひちゃんんっ！ だ、めえええつ！
まじだめええつ！ うち……れ、連続いきしちゃうよおっ！」

「おー。それいいっすね。愛依ちゃんが何回連続いき
できるか、見てみたいっすー！」

「え？ ええええ？ だ、だめだよ？ そんなことさ
れたらうち、おかしくなっちゃう！ ああああつ！
マジで、するの!？」

小柄な色白少女と、日焼けした肌のお姉さん。重な

り合って密着する二人だけど、主導権は完全にあさひにあった。

「だめ！ だめえええつ！ あつあつ！ あひいつ！」

くちゆくちゆから、ぶちゆぶちゆ。溢れるような、破裂したかのような音。

「愛依ちゃん、なんかびゅびゅって飛び出てきてますよ？ これなんすか？ おしっこすか？ お漏らしすか？」

「ち、違つー！ あああああつー！ あひつー！ はひつー！だ、めえええええ！」

「そっかー。ここがいいんすね。愛依ちゃんが一番感じる所なんすね！」

「だめええええええつー！ ああああつー！ で、ちやつうううー！あひいいいつー！」

あさひは左手でぎゅううと、愛依の胸を強く揉み潰す。それと同時に右手の親指でクリトリスを捏ねながら、人差し指で膣壁をぐりぐりと擦りつけていた。

びゆるびゆる、びゅつびゅつと、愛依の股間から噴水のような飛沫が上がった。

「愛依ちゃん、可愛いっす」

あまりにも、気持ちいい。

愛依は翻弄され、体をくねらせながら、大いに潮を吹かされていた。

10. 夜が更けるまで

「うち。あさひちゃんに、ちよーきよーされちゃった」

ぐっすんと泣いたフリ。愛依は何度となくイカされて、夢見心地。

「むー。やっぱり、男の人が羨ましいっす。長くて太いおち●ちゃんが欲しいっす」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅと、あさひは腹いせにかき混ぜる。愛依の中を指で。

「あ、う。あさひちゃん、う、うちもう……いきすぎたよ？ まだ、許してくれないの？ あう。んあつ」

たつぷりと二本指。その動きが止まることはなかった。

ぐしよぐしよに濡れさせられて、何度も潮を吹かさ

れた。まったく、何と過激な初体験だろうか。

「あ、うつ。でもさ、あさひちゃん。うちもね。人に聞いたただけだけどさ。女の子にも、あるんだってさ」

「何があるんすか？」

ピタツと指の出し入れが止まる。興味のある話題になったようだ。

「えつとね。エッチな道具で。女の子の腰に巻き付けて、男の人の……あれをつけちゃうみたいなもの。ペ、ペニバン……だったっけかな？ 確か、そんなだったよな」

「そんなのあるんすか!? 欲しいっす！ どこに行けば買えるっすか？」

「ええつと。うちも、よく知らないんだな。でも、そういうエッチなグッズを売っているお店があるって言

うけど。でもでも……アイドルがそんなお店に買いに行つたとかばれたら、とんでもない事になつちやうよ?」

「そうっすか……。そうっすね。あ、良いこと思いついたっす! プロデューサーさんをお願いするっすよ。代わりに買つてって!」

「だだだだ、だめだめだめ! だめっしょそれは! 絶対だめだよあさひちゃん! っていうかそんな事が冬優子ちゃんにばれたら激おこだよ絶対! プロデューサーも困つちやうよ!」

愛依は鬼の形相をした冬優子の姿を思い浮かべる。ついでに、困惑したプロデューサーの姿も。

「難しいっすね、なかなか」

「あっふ!」

ちゅぽんと、あさひの指が愛依の割れ目から引き

抜かれた。

「それでも欲しいっす!」

あさひはそんな事を言いながら愛依の足を掴んで上げさせて、しつとりと濡れた恥部同士を触れ合わせた。

「ああ! あさひちゃん! 擦れちやつてる! あそこあそこが!? ひゃああっ!」

「それを手に入れてっすね。愛依ちゃんの中を、思いっきりずっずっぶ突きまくってみたいっす!」

「ひええ! うち、またそれで、目茶苦茶にされちやうわけね?」

「そうだ。一つ忘れていたっす。プロデューサーさんがダメなら、冬優子ちゃんに聞くっす! ペニバンっすというのを貸してほしいっすって!」

「だめだめだめだめ！ 絶対だめだよ〜〜！ 余計だめだよ！ 冬優子ちゃんマジおこになっちゃやうよ！ っていうか、冬優子ちゃんが持つてる前提!? それでペニバン着けてプロデューサーをいじめるとしてそれ、どんなプレイなの!? マニアックすぎるっしょ!?!」

「冬優子ちゃんならしちゃうかもしれないっす！」

「さすがにきついっしょ!?!」

——楽しいお泊まり会の夜はまだまだ終わらなさそうだった。

あさひが愛依と割れ目同士を擦り合わせたり。再び愛依の中を指でいじったり、キスをしたり、大きなおっぱいをぐにゅぐにゅんと揉みしだいたりしてからのこと。

「愛依ちゃん！」

「はいいつ!?!」

突如強い口調で名前を呼ばれて、愛依はビクツとした。

「指が疲れたっす！」

「そ、そりや、あれだけ動かしていたら疲れるよ」

「舌もつりそうっす」

「うーん。舌って、つるものなのかな？ 足みたいにな？」

なので、あさひはソファーにどっかりと腰掛けて、足を大きく開いていた。

「愛依ちゃんにも、イかせてもらいたいっす」

「う、うん！ うち、頑張る！」

あさひは愛依の後頭部を両手で掴んで、引き寄せる。

「あむ、ん……」

「んっ！」

愛依の舌先が、割れ目の中へと入ってくる。

「あつ。愛依ちゃん、気持ちいいっす」

「ほふ？ んん……。うち、一生懸命するね？」

「お願いっす！ 手加減無用っす！」

じつくり、たつぷりと、愛依はあさひに「loveを教えてください」に「loveを教

えていくことにした。
より親密な関係となった、パートナーの恥部を優しく、大切に扱うかのように愛撫を続ける。

「うくっ！ あ……。はう！」

あさひの口から漏れていく声。

可愛らしい。愛おしい。

もっと、聞かせて欲しいなどと、愛依は思った。

密着具合が更に高まり、舌の動きも激しくなっていく。
く。

「あつ！ あひっ！ あっあつ！ 愛依ちゃん、すっ
いっす！ くあつ！ ひうっ！」

夜が更けるまで、二人の交わりは続いた。

やがて疲れ果てて、一つのベッドで抱きしめ合いながら眠った。

裸のまま。互いの温もりを感じながら。

11・特別合宿!

「……」

冬優子は二人を凝視していた。

今は新しい振り付けのレッスン中。二人一組で交互に行うような内容なので、冬優子はちよつとした休憩タイム。

それよりも、あさひと愛依の様子がおかしい。明らかに違う。

「1、2、3!」

「1、2、3つす!」

結構難易度の高い振り付けだったけれど、あさひと愛依の二人はほぼ初見ながら通して完璧にこなしてみせたのだ。一発OKとはなかなかないことだ。

「あんたたちさ」

冬優子は腕組みをして、睨み付けるような表情をしていた。

「何かあったの? 妙に息が合って、シンクロ率高いんだけどさ」

その一言に、ギョツとする愛依。

「え? えええつと、別にその、何でもないっていうか。たまたま調子がいいって感じ?」

「ふーん」

納得いかない様子で冬優子はそう応えた。

「この前の特別合宿でみっちり鍛えたつすよ!」

するとあさひが割り込んで来て、そう言った。

愛依は、あさひが何かとんでもない事を言ってしまったのではないかとヒヤヒヤしたけれど、幸いな事にそんな事はなかった。

あの赤裸々な秘め事をばらされてしまうのではないかと、ドキツとした。

「この前? ああ、あさひがカブトムシ取りたいって、わざわざどこぞの山にまで泊まりで行ったっていうアレね」

「そ、そうそう! 二人で一緒に過ごしたから、きっと息が合うようになったんよ!」

「そうっす! 秘密の特訓をしたっすよ!」

特訓……。まあ、親密になる行為だったことは間違いない。ものは言いようだ。特訓……。なのかな?

困惑する愛依とは事なり、冬優子の反応は悪くない。別に、調子が良いことに文句を言うこともないだろう。冬優子はそう思うことにした。

「ま、いいことじゃない。そういうことなら、定期的にやるといいわね。その特別合宿とやらを」

「そうっすね! 愛依ちゃん、また行こうっす!」

「う、うん。そうだね」

「今度の休みに行きたいっす!」

「え? すぐに? ええと、予定……。大丈夫だったかな」

「どうでもいいけど。ふゆはパスだからね」

「愛依ちゃんと二人でいいっす!」

「何をやっているんだか」

というわけであさひと愛依は、晴れてボスのお許しを得ることができたのだった。

秘密の『特訓』をする許可を。

それから数日後……。

「あつうっ! あうっ! あつ! は、げしすぎ……
くううっ! あさひ、ちゃ、ん!」

結局。愛依が『足がつかないように』と、慎重に選定したルートによって入手したペニバンをあさひは嬉々として装着して、愛依を四つん這いにさせて、濡れそぼった割れ目目掛けてガツツンガツツン腰を前後に動かしまくっていた。

「おお、すごいっす! やっぱりすごいっすね! これっすよ、この感覚! 楽しいっす! 男の人の気持ちがよくわかるっす!」

「ああああつ! はああああつ! あさひ、ちゃん、また……い、くううう!」

がくがくがくがくと愛依は激しく揺さぶられている。

大きな胸がだらんと垂れて、ぶるんぶるんと前後に震えている。ずにゆずにゆ、ずちゆつずちゆつと、挿入しているであろう卑猥な音が断続的に聞こえてくる。ピンク色で、柔らかな素材の異物が。

ふつくらとした丸みを帯びたお尻があさひの下腹部とぶつかり、打ち付けられるたびにふるふるど弛んでいく。

「あ、ううう！ はううつ！ あつあつあつ！ だ、めえええ！ はっ！ あっ！ あふっ！」

好奇心が旺盛過ぎる女の子によって、犯されているかのよう。

愛依は柔らかなカーペットの上で喘ぎまくっていた。のたうち回るかのようには、

もちろんペンバンだけじゃない。

愛依はついでにブルブルと小刻みに蠢くローターなんてものも入手して持ってきたから、さあ大変。乳首をぐりぐりと攻められて、愛依はあつという間に快樂の渦に叩き落とされていった。

「愛依ちゃんを調教するの楽しいっす！」

白い歯を出してニツカリと笑うあさひ。無邪気で純粋な少女の獲物はカブトムシではなくて、愛依だった。

ビニールテープを用いて愛依の左右の乳首にローターをくくりつけて、スイッチオン。

そのまま立ちバックスタイルで後ろからガツガツ攻め立てた。容赦無く、本気の動きで。

「動くっすよ！」

「ひいん！ あ、あさひちゃんのドS〜！ あ、あ、あああああつ！ うちまたい……つくうううう！」

何だかキャラクターが変わってしまった愛依。

いった回数を教えて欲しいっすとか、あさひが言っ

ているけれど、意識が飛んでいる愛依には聞こえなかった。無理だった。

愛依はあまりにも気持ちが良いすぎて、だらしなく大口を開けて涎を垂らし、ただひたすら欲情した獣のように甘ったるい声を上げていった。

了